

H22年 第49回粒子線世界会議講演 原稿

堤 静 香

私は6年前の春に、重粒子線治療を受けました堤静香と申します。

今年も4月、6回目の美しい桜をめぐる事が出来ました。
桜は、一年一年私の生きる希望となっております。

生きて参りましたこの6年間の私を、皆様のご参考になればと思い、少しお話させていたきたいと存じます。

頭頸部の骨肉腫に罹患

平成16年3月、私は国立がんセンター中央病院に 於いて、頭頸部の骨肉腫、いわゆる骨のがん、だと宣告されました。

顔に出来る骨肉腫は、100万人に一人、と言われる程、稀ながんで、5年生存率は僅か30%程度、だと言う事でした。

しかも、手術が成功して生き残ったとしても、実はそれ以上に、顔の半分を切除される事によって起こる、機能障害、美醜を問われる審美障害が大きく、生活の質の大幅な低下を克服する事の方が、困難だと言う事でした。

顔に出来た「骨肉腫」、昔は不治の病とされ生還する人は居なかった、と言われる難病で、45年前に 「愛と死をみつめて」と言う映画が、大ヒットを飛ばしました。

その主人公の 大島みち子さん「ミコ」が罹患したのと同じ病でございます。

ヒロイン「ミコ」役を、吉永小百合さんが演じた映画、と言った方がお解かりになる方が多いと思います。

「ミコ」と同じがんで、出来た場所もほぼ同じ、左上顎部、ほほ、の辺りでした。

残念ながら、この病気は45年経った現在でも、抗がん剤や放射線の効果が無く、外科切除手術しか方法が無いと言われてまして、愕然としたのを鮮明に覚えております。

「私は、この病気を宣告された時、殆ど生きている状態では有りませんでした。！！」

顔が半分無くなる！！、という現実、奈落の底に突き落とされた、恐怖の感覚しか覚えていません。

ただただ、終日仏壇の前に座って、ひたすら、念じる世界に逃げ込む事しか出来ませんでした。

朝から晩まで、親鸞の正信念仏偈、仏説阿弥陀経、蓮如の御文章等、繰り返し繰り返し、憑かれたように拝んで、他の事など考える事さえ恐ろしかったのです。
親鸞聖人の、お経の世界に、逃げ込んでおりました。

処が、10日程経ったある日、誰かに抱えられているように、身体が軽くなったのを忘れる事が出来ません。

次第に心も軽くなり、手術祈願にと思い、日頃から参詣している神社に行ってみようか!、という気持ちにもなりました。
神社から帰る頃には、「おや?」と思う程、すっかり気持ちの持ち様が変わり、何か自分以外の力が働いているのを強く感じたのを今でも鮮明に覚えております。

それからです、不思議な現象が起こったのは!!。外科手術の為に入院する3日前、主人が見つめて来た、「新聞記事」との神がかり的な出逢いが有りました。

重粒子線との出会い

平成16年3月25日、木曜日の新聞に、「重粒子線、がんの深部にピンポイント」という見出しが目飛び込んで参りました。

これまでの放射線と違い、炭素イオンの重粒子線と言うのが、骨のがん、に効果があると言う様な内容で、私はその新聞記事に何か直感的なものを感じたのです。しかし、手術の為に入院の日は、3月29日の月曜日で、27,28日は、土、日、病院は、お休みなのです。

がんセンター中央病院に掛け合うには、26日金曜日の、たった一日しか有りませんでした。

主人は翌朝早く、私の外科手術担当の先生に掛け合う為、病院に駆けつけました。

「重粒子線」、6年前のその当時、がんセンターの先生でも、どの程度、この高度先進医療に移行したばかりの治療法の認識がお有りだったかは定かではありません。

むしろ自分の手を離れて、未知との遭遇に一縷の望を懸ける患者に「紹介状を書きましょう」と快く頷いて下さった先生に今となっては感謝さえ致しております。

放医研へ

かくして、急転直下、私はがんセンター中央病院での手術を取り止め、3月29日の本来入院するはずのその日、思う迷う事無く放射線医学総合研究所、通称「放医研」の門を叩いていたのでした。

この一連の出来事は今も「神様が降りて来て下さった日」と、私の人生を左右する重大な1日となって記憶に刻んでおります。

今では重粒子線治療もマスコミに取り上げられて、多くの人達が知る処となりましたが、当時は世界に二ヶ所、ドイツと千葉県稲毛市に有るだけで、知る人も少なかったのです。

また重粒子線に辿り着く殆どの方が、大学病院や大きな病院からの紹介で、それが何なのか、症例数も治療法も、放医研で説明を受ける迄解りませんでした。

更に、治療するまでにクリアすべき検査も多く、途中で断念しなければならない人も、少なく有りませんでした。

無事検査も終えて喜ぶのも束の間、主治医の院長から愕然とする事実を説明され、再び奈落の底に突き落とされたのでした。

100万人に一人と言う頭頸部の「骨肉腫」自体少ないこの病気の治療は、私が第一号！！ だと言う事だったのでした。

過去の臨床試験に於いて、低い線量の照射で5名の骨肉腫患者が全滅だった、と言う衝撃的な事実を正直に説明されました。

しかし、70,4グレイという高い線量に上げて行えば「成功するだろう」と言う予測はある、と言う事でした。

所謂、身体に照射する高い線量を、顔面に施すと言う事だったのでした。

当然症例数は0、私が初めての試みです。

私は、これしか治療法は無い、と閃いた決意は固く、一心不乱に駆け込んだ私には、否も応も有りませんでした。

迷う事無く「お願いします！」と頭を下げておりました。

重粒子線 照射

70,4グレイの線量は、16回に分けて照射されることになり、2ヶ月間の入院生活になりました。

私は、地下にある重粒子線照射室に向う地下道を通る度に何故か、検査待合室の一角にある、不動明王様を見つけると「行って来ます！」と毎回手を合わせておりました。

最先端の医療の世界に、不動明王という仏像が置いてある事に此の病院の優しさを感じ取り、安堵したものです。

照射室に入り、固定具を着けられると、決まって、親鸞の「南無阿弥陀仏！」を念じ、常に参詣を続けている、寒川大明神様の祈願の言葉を唱え、八百万の

神様に一心にすがっている自分が有りました。

高度先進医療と言う科学の分野に、常に神仏がいると言う不思議な拠り所は今も続いております。

重粒子線照射を終えて

まず、照射後、2ヶ月で激痛が訪れ、痛み止めの薬は全く効かなくなりました。

MSコンチン、オキシコンチン、とモルヒネの錠剤に変わり、量もどんどん増えて参りました。

それでも痛みが取れない為、その内、身体が固まって仕舞うような激痛になり、再度入院する事になりました。

新しく開発された皮膚に貼るモルヒネ、「デュロテップ」と言う新しいタイプのモルヒネを使って痛みを取る試みをしたのです。

錠剤でしたら320錠に換算される、と言われた、この「デュロテップ」のお陰で、激痛を取ることが出来、ようやく、日常生活を取り戻すことが出来たのです。

痛みが取れた時、私は、現代の日進月歩の医療に救われ、「生かされて幸せ！」と痛感したものでした。

「デュロテップ」で痛みを取る生活は一年間続き、此の様な状態で、最初の1年間は、1週間に一度、2週間に一度、1ヶ月に一度と、ああ！通院の間隔が少し、長くなって良かった！！、と喜んでいると、また、毎日通う事になったり、とその繰り返しでした。

兎も角、症例第一号の私の症状は、私だけでなく、院長を始めとするプロジェクトの先生方にとっても手探りの状態でした。

何故なら、言葉は悪いのですが、がんを吹飛ばす重粒子線の威力は凄まじいもので、それだけに後遺症との闘いに他なりませんでした。

高い線量照射第一号の私以外に、症状の症例が無い為に、後にも先にも私の治療結果が先生たちの経験になり、後に続く患者への症例に繋がると言う事実でした。

私も先生達も、必死でした。膨大な資料が出来上がりました。

腐骨の除去

プロジェクトの先生の中に東京歯科大の先生がおられ、1年後、この東京歯科大において、重粒子線治療の為、後遺症として出来た、「腐骨」、つまり、腐った骨

を 除去する手術をする事になりました。

今でも毎月、東京歯科大の口腔外科に治療に通っております。

この様に、次から次と段階を置いて起こる症状に、3年間は、うしろを振り返る余裕すら有りませんでした。

3年を経過した頃、ようやく私は一区切りが着き これから先の自分の生き方と言うものを考えてみようか、という気持ちになりました。

生き延びられるかも知れない、と思い、1年1年を、いえ、1瞬1瞬を、大切に思い残す事無く、生きようと強く感じ、このパッションを形にしたい、と思いついたのです。

「米寿と古希の会」

先ず、おとし、25年以上同居している私の母が 88歳の米寿を迎え、加えて命の恩人でもある夫が、少し早かったのですが、70歳の古希を迎える事に気が付いた私は「米寿と古希を祝う会」を計画することに致しました。

常に支えてくれた、母と夫への感謝の念と、病気になっても変わらずに励ましてくれた友人、知人への御礼の気持ちを込めて30名の思い出に残る温かなパーティになりました。

マコとの出会い

又、その間、不思議な出逢いがございました。夫の大学の講演会で同じ大学出身の「愛と死を見つめて」の著者、河野實さんの講演に招かれ、「マコ」に直面した事でした。

マコさんは私の顔を見ると、本当に「顔がありますね」と驚愕され、「信じられない!」、と何度もおっしゃられたのです。

マコさんとの出会いは何か因縁のようなものをお互い感じ、それ以来、今ではメールのやり取りをして交流させて頂いております。

ボランティアへ

この間、私は、自分のがんに罹患してから、多くの がん患者の方と重粒子線治療を通じて交流するようになりました。

中でも埼玉県のある幼稚園の園長、家所さんとの巡り合いは劇的で、その方の慈愛に満ちた優しさと、励ましを頂いたお陰で、ボランティアに目覚めるようになりました。

私と同じように病気に悩む人達、特にがんを罹患した人の焦燥感、奈落の底に落ち込んだ人への聞き役に

時間の許す限り、東奔西走するようになりました。

これから、たとえ重粒子線治療をする事が決まっても、がんに掛かった人は同じように不安な気持ちを抱えているものです。

自分が落ち込んだ時の気持ちを常に忘れず、そのような方々には直接逢って、私の顔を見て頂いて「このように治るのですよ」と安心して頂く様にしております。

北は北海道から、その彼女は「脳腫瘍」で重粒子線治療を受けた後、一昨年、元気な赤ちゃんを産みました。今も定期健診を受けながら、子育てに励んでおります。

南は、鹿児島県の80歳近くになる、お婆ちゃまも、「仙骨」に出来た骨肉腫を、重粒子線治療で克服し、今でも元気に、田舎で一人暮らしをされて居ります。

身近では、千葉や、東京のお友達は、「脊索腫」を3度の重粒子線治療を乗り越えて、克服し、またお1人は、自分の「メラノーマ」を克服しながら、「白血病」に罹られたお母様を看護されています。

このように、ほんの一例を紹介しましたが、私も頭の下がる素晴らしい、お仲間と、今も励まし合いながら、交流を致して居ります。

大学へのチャレンジ

そして昨年、私に取りまして、この5年間の苦勞が報われる最大の事が起きました。

立教大学に、立教セカンドステージ大学が設立され、昨年2月、その二期生の試験にチャレンジし、合格した事です。

入学規定のエッセイには、この「5年間の闘病生活」を書きました。

すると、大学からの要請でテレビ出演のご依頼があり、「生島ヒロシ・定年塾」という番組に出演する事になりました。

エッセイの審査に当たった試験官の教授たちに、感動を与えた、という理由だったようです。

「生きる・学ぶ・ある女性の挑戦」というタイトルの「生島ヒロシ・定年塾」出演は闘病の生活をお話させて頂き、昨年5月に放映され、番組始まって以来の大きな反響を頂きました。

今年、1月にも、大学入学後の私を追掛け取材して頂き、第2弾が放映された処です。

母の病気（がん）

大学生活は順調な滑り出しをしたかに思いましたが、神様は中々私を楽にはさせて呉れません。

昨年6月に、90歳になったばかりの母に大腸がんが見つかり、開腹手術を余儀なくさせられました。

「禍福は糾える縄の如し」と申しますが、まさしく、良い事も悪い事も、容赦なく起こる物だと実感致しました。

しかし、大正生まれの90歳の気丈な母は、生きることに前向きで、頭が下がる思いを何度も味わえた事が大いなる収穫でした。

今では親子共々、堂々とがん患者として、生きております。

親鸞について

代々敬虔な浄土真宗信徒としての、この母に30年程前に貰った、親鸞の経本を通して、念じる世界に入っていたからこそ、常に、親鸞は私の生活の隣に居ました。

たからこそ、強い気持ちで未知の世界、重粒子線治療にもチャレンジ出来たと、自負致しております。

そして、私は立教セカンドステージ大学本科の修了論文のテーマを「親鸞考察」に一点の迷いも無く決める事が出来ました。

この度、その修了論文が2つのホームページ（HP）に掲載され、密かに大きな反響を頂いている事を知りました。

この世に偶然は一つも無い、全て必然で繋がっている事を身を持って感じるようになりました。

先程、ご講演をされました、辻井先生は、6年前の新聞記事に詳しくご説明をされておられ、その辻井先生の記事を読んだからこそ、放医研へと、心が動いたのです。

私はこの「骨肉腫」と言う大病を通じて「人は生きているのだろうか？ 生かされているのではあるまいか？」と言う気持ちを強く感じるようになりました。

今では大病をした事への感謝の念を持つようになり、何が起こっても、最後まで諦めない！！と言う強い気持ちで、重粒子線治療や、立教セカンドステージ大学に、果敢にチャレンジした気持ちを忘れないように、此れからも、いろんな事にチャレンジして、一瞬一瞬を大切に、生きて参りたいと思っております。

本日、この講演の機会を与えてくださいました、群馬大学の先生方に、心からお礼申し上げます。

今後、この群馬大学重粒子線医学研究センターが、多くの、がん患者の皆様の、希望の場所に成りますことを望んでやみません。

皆様、本当に、ご清聴を有難う御座いました！！